

白金霞

九月号



平成25年9月発行 第31号

白金葭定例会会案内

月例会会報（13／9／20 十五夜、胡麻）

十月七日（月）武蔵野吟行（箭弓稲荷と吉見百六）

東武東上線東松山駅 10時 10分集合（池袋9：15発）

十月十八日（金）12:00～15:00（コビアン一階：昼食込）

兼題：落花生、御命講

十一月十五日（金）12:00～15:00（アビスタ第一和室）

兼題：立冬、朴落葉

十一月二十六日（火）10:30 千駄木駅。アカデミー回廊 13～17

十二月二十日（金）12:00～15:00（アビスタ第三学習室）

兼題：葱、湯たんぽ、

落花生、御命講の参考句（十月十八日分）

落花生干して海鳴り届く町

山尾かつひろ

落花生遠き月日の殻潰す

立岩利夫

一と筵落花生干す菓師堂

岩上登代

雁鳴くや落花生掘る山の畑

桜木俊晃

落花生弾あるときは地をくぐり

栗生純夫

御会式の母の手にぎり歩きけり

細川加賀

日だまりに菊百鉢や御命講

清水基吉

月出でて空定まりぬ御命講

中 火臣

お命講や立ち居つ拝む二法師

村上鬼城

なんといふ暗さ万燈顧る

橋本多佳子

鉦太鼓聞こえ万燈まだ見えず

後藤図子

飯田孝三

増田陽一

増田悦子

黒胡麻に新米の湯気立ちにけり
月が出てゐると言はれて目で探す

光成高志

雲のなき十五夜かすむ通夜帰り
鰯雲治らぬ人を見舞ひきて

松村幸一

先つぽに花を残して胡麻実る
胡麻の蒔三十五層開き初む
鹿島ならで大利根原の月見かな
午前二時半の良夜の地震かな
白足袋の三匹獅子舞地を擦りて

光
み
ち

晴れ晴れと胡麻の出番のおはぎかな
焙烙に胡麻の撥ね合ひおこりけり
露の世に一文書いて熱くなる
しまひまで望の月見る人はなし
松原も渚も海も良夜かな

浅野正美

我家から見ゆる十五夜見にゆかん
舟にゐて出づる満月真向へり
単線の電車待つ椅子秋の蟬
鈴虫の声の波音寝入り端
空晴れて胡麻打つ昼の小半時

吉羽多美子

十五夜のすすきを探す散歩道
小さな実セサミパワーはあなどれぬ
名月や「月見どろぼう」許さるる
秋彼岸庭に咲きたる花供ふ
すり鉢を押へて胡麻の香りたつ

杉浦弥栄子

胡麻和への胡麻の香みつる夕厨
雲ひとつ居据る秋の暑さかな
起きぬけにすんと秋の風となる

十五夜の兎目で追ふ風少し
一品は胡麻和え酒のつまみかな
台風過日本国中掻き回し

氣をこめて墨する汗に秋の風

敬老日四人に一人仲間入り

原爆忌人を溶かしてしまつた日

白布を被つて行けと広島忌

幼な児やかぶりを振つて母に付く

胡麻むすびそれはおこわで敬老会

十五夜の団子いくつがいびつなり

柿みのる甘くなれと酒そそぐ

やぶがらし秋猛烈に繁茂せる

百花園萩のトンネル二度三度

敬老の日ゴマと赤飯金千円

満月は昔の合戦眺め来し

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 胡麻叩き干して産土出ずじまひ

胡麻干して叩き産土出ずじまひ

3 胡麻せんべいぱりつと割れて秋の風

青木啓泰

小山陽也

3 月出でよ出でよアオマツムシの声

3 胡麻の蒔三十五層開き初む

3 松原も渚も海も良夜かな

2 マイヨールの裸婦^{ヌード}目つむる良夜かな

2 胡麻和への胡麻の香みつる夕厨

2 雲ひとつ居据る秋の暑さかな

2 台風禍日本国中掻き回し

2 しまひまで望の月見る人はなし

2 台風過日本国中掻き回し

2 午前二時過ぎの良夜の町の地震^{なみ}

2 午前二時半の良夜の地震かな

2 十五夜の団子のいくつがいびつなり

2 十五夜の団子いくつがいびつなり

2 高気圧来て胡麻の莢鳴りにけり

2 高気圧来て胡麻の蒔鳴りにけり

2 先づばに花を残して胡麻実る

2 百花園萩のトンネル二度三度

1 満月は昔の合戦眺め来し

1 すり鉢を押へて胡麻の香りたつ

1 十五夜の兔を目で追ふ風少し

1 秋彼岸庭に咲きたる花供ふ

陽一

高志

幸一

孝三

多美子

〃

弥栄子

幸一

悦子

高志

高志

啓泰

陽一

高志

陽也

〃

正美

弥栄子

正美

正美

正美

陽也

正美

悦子

陽一

孝二

"

悦子

啓泰

幸一

陽也

正美

みち

孝三

啓泰

高志

唱志

-
-
-
-

夫子

「す」といふ措辞は真直く落ちたる様をいふから

とんと胸におちた秋の風をうへなつた故に 秋の風と

ると断定されたのだ。初秋の朝の屈てる

名月や「月見どろぼう」許さるる

正美

正美さんのお母様の言葉を受けての作句とか。縁側に月見団子を供え、すすきを花瓶に生けて月見する。近所の子どもたちがこれを黙って持つて行っても、「月見どろぼう」とは言われない。月見どろぼうは許される。花どろぼうも許されると聞いたことがあるが、今時の野暮な主だと「こらあ」といつて怒るのだろうて。

胡麻干して叩き産土出ずじまひ

孝三

原句は「胡麻叩き干して」となっていたが、胡麻は干して叩いて胡麻粒を收穫するので、右のように直して鑑賞する。これも作者の祖母を詠われたとか。明治二年生まれとか。樋口一葉が明治五年生まれであるから、三つ年長であられる。胡麻を播き育て刈り取って、干してそれを取り込み叩いて胡麻を取る。米麦豆落花生などと同じ手間がかかる胡麻作りであるが、それを年々歳々繰り返して産土の土地を出ず仕舞で人生を終った。一遍位はでたかったであろうに、という作者の感慨は省略されている。人は先ず、はらからに思いをいたすことから来し方を振り返るものである。

日傘、杖、跛行、戦艦ポチョムキン

陽一

この句はのつけから？である。しかし待てよ。戦艦ポチョムキンとは何ぞ。これは映画の題名だ。セルゲイ・エイゼンシュテイン監督によるソビエト連邦のサイレン

ト映画。日本でも公開された。一九六七年のことである。

私が上京して住み始めた年である。それはさておき、この映画で最も印象的とされるのは「オデッサの階段」と言われる約6分間の場面で、「映画史上最も有名な6分間」と言われる。特に撃たれた母親の手を離れた乳母車（が階段を落ちていくシーン）は、『アンタッチャブル』などの映画でも引用されている。テレビの夜の映画劇場で放映されていたので、見た記憶がある。作者は、日傘・杖を持ち跛行の夫婦同伴の外出をこなし、句会にお出ましになる。戦艦ポチョムキンしながら外出なされる。オデッサの階段とて上り下りするのだという決意の句と見た。句会を主宰している者として、ほんとにありがたく、陽一さんの強い意志に敬服する次第です。どうか、オデッサの階段は、我々の周りには決してありませんので、ご安心なさってお出かけ下さい。

松原も渚も良夜かな

幸一

一読、三保の松原を思い浮かべた。この度富士山の世界遺産登録と共にその中に入った松原である。白砂青松は誰もが想像する日本の風景であるが、掲句は丁寧（ていねい）に視点を松原、渚（なぎさ）と移動させて、いずこも良夜であると、かなの切れ字で切られた正統俳句である。今年の十五夜は明月となるほんとに満月でどこでも晴れたので、良夜の季節どおりであった。午前四時頃の良夜のかはりなく

（誓子）の句を見ようと、私は安眠できず、午前二時に目覚め、明月を見た。天心に高く小さく月明の地であった。また床に就いて眠り出した途端、地震に揺られた。

一句鑑賞

飯田孝三

胡麻せんべいぱりつと割れて秋の風

悦子

「ぱりつと」と「秋の風」の呼応が秀逸。せんべいが割れる小さな音に爽涼の秋を感じたのである。巧まぬ擬声「ぱりつと」が利き、「秋の風」を配するあたり、詩的感覚が細やかに澄む。「割れて」の客観表現がいい。“小さい秋”がそこにもあった。題詠「胡麻」、季語は「秋の風」。一句の音調からすると、「草加せんべいぱりつと割れて秋の風」もあるかもしれない。

先つぽに花を残して胡麻実る

高志

胡麻の蒔三十五層開き初む

”

いづれも細やかで的確な観察に驚く。子供の頃、胡麻の生育ぶりは見馴れていた筈だが、すっかり忘れていた。それがありありと蘇る。確かに、胡麻は下から花が咲き実を結ぶ。普段のことば「先つぽ」がいい、そこに残る淡紅紫いろの可憐な花がありありと目に浮ぶ。“俳句は普段のことば”の思いが今更に深い。

胡麻の「蒔」はつまり蒔果、1粒ほどの茎に二三粒の果実を層状に多数つける。高志さんの話では、蒔は35（

40層にもなるそうだ。「三十五」層が「胡麻」と響き合い、用字の大層ふりと相まって、情趣を高揚させる。対して「開き初む」が初々しい。知らんぷりでこぼすユウモアが憎い。高層の走り霞ケ関ビルは、たしか三十六階。「〇〇〇層」といえば、つい高層住宅・ビルを連想する。なにやら、蟻になったような不思議な気分になる。

晴れ晴れと胡麻の出番のおはぎかな

幸一

胡麻塩、胡麻和えなど、胡麻はいつも主食の脇役。どっこい今日の出番は「晴れ晴れ」主役、胡麻のおはぎである。伝統の食文化には疎いが、おはぎは萩、ぼた餅は牡丹に由来するとか、前者は胡麻、後は餡がお似合いだ。高気圧来て胡麻の蒔鳴りにけり

陽一

「高気圧」はもとは氣象専門用語だが、つとに一般市民権をえた現代語である。最たる雅語、感嘆の「けり」と対照きわやかに、かつ渾然と和んで面白い。「けり」の切れ鮮やかに、台風到る胡麻の「蒔鳴り」が聞こえる。

一句鑑賞（30号分）

飯田孝三

一管を伝ふ甘露や蓮の酒

幸一

まづ「一管」が雅な連想を誘う。九輪の水煙に舞う天人が奏でるか、はたまた五条橋をゆく牛若丸が吹くかと思いきや、連集集い、象鼻盃を吸う。つい、その“おちよぼ口”、“うけ口”が目には浮ぶのだが、巧まず「蓮の酒」

と収めて雅を重ねる。めでたくも、心憎い。蓮の花は、仏教では浄土の花、極楽の象徴である。大賀蓮より古い、紀元前一四〇〇年の蓮が行田市で出土し、今に花を誇る。さて、その長寿に肖ろうではないか。甘露甘露。切字「や」が利いて、蓮花の典雅な微薫を宙にただよわす。エンジンの唸る中にて終戦日

高志

葭社恒例、八月十五日の蓮見舟吟行である。舟は、かなりの年代物と見うけられるが、艫に備えるエンジンの音滑らかに湖面をゆく。はて、その唸りに耳を澄ましなから、思いを馳せるのは何だろう。今も耳底に残る、空を覆うB 29の爆音だろうか。ふと、思い出すのは、戦没学徒兵の手記にあつた一句である、「エンジンの唸りさびしや糸つつじ」。特攻戦士の遺句である。出撃前の一刻、エンジンの響きにゆれる糸つつじに注ぐ兵の視線が見てとれ、堪らない。掲句で気になるのは、〳中〴にて。少々、断り過ぎて出っ張るきらい。〳中〴にゐ、とぬく手もあるだろうか。

手賀沼の秋風に会ふ坂の町

興正

常磐線我孫子駅を出て南へ、なだらかな坂を十五分ほど下ると手賀沼である。沼畔周辺には、かつて白樺派などの文人達が住んだ。坂の中ほどまで来ると、視野が開け沼が見えてくる。沼というより湖という方が相応しいだろう。広い水面を渡ってくる涼風が汗ばんだ肌に快い。

秋である。古歌を引き合いにするまでもなく、風が秋を知らせる。「秋風に会ふ」は、ふつと秋を肌身にした一瞬の実感を詠う、けだし初秋のことばである。

（秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
古今集百六十九番藤原敏行朝臣 など編集子追記）

私乗れば少し沈むか蓮見舟

悦子

蓮見舟は、定員十五名、古い木造。艫から乗る。連衆が次々に乗り込むと、その度、左右に揺れ、端艇用のエンジン据える艫がちよつと沈む。「私」が乗ったって、そりやそうなる。恒例の蓮見吟行、掲句は、いざ乗り入れる足元を無心に見つめ、件の舟の容子を有態に目に見せ、外連ない。蓮見の句は、凡そ、蓮の花を視、それを艇にし、或はイメージを膨らませて詠まれるようだ。掲句は蓮見の句として独自である。「少し」に潜む諧謔が、沈む「か」の軽いタッチと呼応して面白い。

（投句一覽掲載順）

一句鑑賞（30号分）

武者昭七

手賀沼の秋風に会ふ坂の町

興正

「秋風に会ふ」という言い方がなんともやさしい。風に誘われるのでもなく風が誘うのでもない。二つのもののおのずからの出会いが「会ふ」である。坂は出会いの場所である。出合った相手は秋風である。やあ、お久し

ぶり。なつかしいなあ。待つてましたよ。あなたに会うとホツトしますよ。風はシナツヒコと呼ばれるカミの息であつた。それは四季折々のくらしとともに絶えず人々の身近にあつた。この句、ゆつたりとしたおおらかなリズムがそんな時代の人と自然のつながりをよみがえらしてくれる。

猪の鼻もありたる象鼻杯

孝三

象鼻杯とはどんなものか不案内だけれど（広辞苑にもなかつた）想像するに象の鼻のごとく細長い杯のことであらう。蓮見船のことらしいから多分

一管を伝ふ甘露や蓮の酒

幸一

と詠まれた一管がそれであらう。それならば手に折り取つて作つたマイカップである。当然なかには象の鼻に似ても似つかぬ名品（？）があつてもこれも一興、船中に笑いの渦が沸き起こる。「ありたる」と完了形を選んだのはそんな遊樂のひとつを今なつかしく思い出しているからである。船中の余韻を楽しんでいるのだ。「けり」ではそうはいかぬ。その場限りで終つてしまふ。措辞にうるさい（失礼！）のは氏の身上である。

青鷺の一羽空占む終戦日

みち

夫君の高志さんが30号で丁寧に説いておられるからそれ以上は屋上屋を架することになって恐縮だけれど、中七の「一羽空占む」はその措辞といい幻想の美しさと

いい抜群である。青鷺は空の一角を舞うのではない。大きな幻想の翼を広げて作者の頭上を厳かに舞い来たり舞い去るのである。鳥が死者の靈魂の運び手だとか、死者の靈魂が白鳥と化して天翔つたとかいう伝承はおおい。ときあたかも終戦の日。大戦で非命にたおれた多くの幽魂が故郷の空行く姿でそれはあつたかもしれぬと思う。そんなことまで想像させる一句である。

ハガキ句三十二報（07／12／17）

皇室の苑に向く窓干布団

たか子

冬ざれや仏も石も相ひ似たる

裕子

手賀沼師走句会

柚子豊年里のくらしの便り来る

かほろ

張網の真上太陽十二月

三穂

冬樗父祖とほつおの血ありありと

孝三

大根を炊きあぐ匂ひ鬼瓦

春美

棧橋に白菜干して波の音

敏子

冬の波眼鏡を拭き帰郷せず

不憫

山茶花に真白き日差しありにけり

白木

落葉掃く奥に直哉が居るやうに

哲也

婦警笑む駅前交番十二月

妙子

クリスマスツリー集まれ一人っ子

たか子

青北風や三角波うろこ波

多佳子

葉牡丹の渦や被爆の石囲ひ

高志

翌日のFAXに

掌にうけて弾みて柚子のひかりかな

孝三

はがき句報三十二号管見

飯田孝三

大根を炊きあぐ匂ひ鬼瓦

春美

大根を炊く湯気が立ち上る棟の端の鬼瓦が目止まる。視線が湯気をたどる寸時の描写に人々の生活のさとと匂いが籠る。この頃、都会では余り見かけなくなつた情景だ。昭和一桁は時の推移と世の変貌にふと思いを馳せる。ふくらかな湯気の匂いといかつい鬼瓦の面相の対照ぶりも面白い。因みに、京都鳴滝の了徳寺の行事に「大根焚き」があるが、その句とは思わない。そうだったらつまらない。「年惜しむ瓦嚙みたる鬼瓦」(山田みづえ)

柚子豊年里のくらしの便り来る

かほる

「豊年」が利いた。黄金の柚子がたわわ、その外の実りも豊かな家郷のありさまが見える。「便り」のなかみが見え、その先になにかがある。だが、その何か

棧橋に白菜干して波の音

敏子

情景が見え、その先になにかがある。だが、その何か

が、いま一つ、分らない。「くして」と「波の音」との呼応もひたとは響かない気がする。

葉牡丹の渦や被爆の石囲ひ

高志

「や」が浮いてやいないか。ために「渦」が出つ張り、「く囲ひ」と相乗、思いを軽くする。むしろ、例えば「葉牡丹の渦が被爆の石囲ふ」だろうか。

婦警笑む駅前交番十二月

妙子

歳末駅前風景寸描。婦警ならでは句にならぬ。「笑む」が臍。ほかの月でも句にならない。

皇室の苑に向く窓千布団

たか子

新宿御苑での世上寸描の吟。思いは複雑である。

妄言多謝、以上。

(19・12・24)

冬櫟父祖とほおの血ありありと

孝三

我孫子駅南口から成田街道へ出る大通りは、仙台ほどではないが、櫟並木通りになっている。冬櫟の枝の天上への伸び振りは力強いし、男ならわあつと声を上げて万歳でもしたくなる勢いが感じられる。そうした冬櫟を見上げて居ると、身内に父祖の血脈をありありと感じると言う句意であろう。こういう先祖の血は科学的にはDNAと言うのであるうか、自分ではどうしようもなく、湧き立つ瞬間がある。みちさんに聞くと、そういうことはないというから、これは男のみに備わった魂かなと思う。

お便り広場（到着順、敬称略）

先日の蓮見吟行ではたいへんお世話になりました。また、ご丹精された茄子を沢山に頂戴しました。お礼を申し上げます。紺たぎる茄子から連想することばは、「土」「充実」、そして古語の「益荒男」などだろうか。いただいた茄子を見ていて思ったことです。

短かり父の壮年秋茄子

秋茄子紺ふり絞り蓆尻辺

（お知らせ）

幸一さんから、拙句「茄子の馬」について過褒をいただきました。先日、句会の帰り、コビアンでの酒席のほづみで、ご披露したまでですが、態々、お葉書をくださいました。感激のほかありません。今後の励みになります。日夜、盛夏を凌ぐ暑さゆえ、ご夫妻ともども、何分にもご自愛の上、ご清吟されますよう念じ上げます。

（平 25・ 8・ 21 飯田孝三）

「白金葎」八月号拝受いたしました。孝三先生の「茄子の馬」肅然とし襟を正しました。一転して甜瓜、戦前はよく食べましたが、戦後は全く御無沙汰、正美さんの句にあった句同感でした。孝三先生の高志さんと敏子さんの句については全くすばらしい文章に感激しました。相変わらずの充実、光成さんのご努力とご苦勞に感謝して

います。益々の御活躍を。（8・ 22 小山陽也）

受贈誌（九月号）

佐久走る移動図書館麦の秋（飛行雲 68号） 駿河岳水

予科練の湖の際まで稲を刈る（リ）

句敵の墓を濡らしに竹の秋（彩 112号） 平野ひろし

句敵はおほかたあの世魂迎（リ）

わが内の活断層と霜柱 （雷魚 94号） 増田陽一

墨留風島の土産の塩鯨 （あすか 9月号） 山尾かづひろ

俳窓評論纂

*「彩」112号は二十周年大会の特集が組まれている。大会の模様が参加者の手記を読めばよくわかる。ひろし主宰の特選句は三句、天は「春深む出湯の側溝硫黄臭」（茂木つや子）、地は「青箱根ゴンドラの空すれちがふ」（貫名弘子）、人は「落椿踏みしかれて雀色」（鈴木泰子）である。大会は四月末の箱根で行われており、三句とも箱根の情景とすぐわかるいい句と思う。特に、天の句は、ひろし選の独自性がよく出ている。出湯の側溝と来て、硫黄臭で止め、その句いが春深む箱根の作者の過去現在の架け橋になっている。「春深む」は「春惜しむ」でないところ、よく季語が働いている。側溝といえど、町では雨水を流すU字溝が使われる。私が見た経験では、八海

山の麓村では山清水が滔滔と流れていたし、富士吉田では富士の伏流水が滔滔と流れていた。硫黄臭は、北海道に硫黄山という山があつて、黄色い煙と共に、硫黄臭の岩山まで行けた記憶がある。側溝といい、硫黄といい、無機質な物質が、季語と歌枕と反応して詩語になるのだ。

圧巻はやはり一誌一句取り上げられた誓子句を羅列された頁である。皆、天狼の遠星集作家が親しんだ誓子句である。私がここで驚いたのは、彩106号に書かれた棄てギブス病院の秋深まり

誓子

である。私の記憶になかったばかりでなく、この棄てギブスをみた経験があるからである。自分のギブスを外して、要りますか?と問われ、要りませんと答えたその日、洗面所の隅に私のギブスが棄てられてあるのを見た時の心持を思い出したからである。

＊朝日新聞八月23日オピニオン欄に「行きづらい世を生きる」の題名で、記者が渡辺京二さんにインタビューした記事が載った。氏は、近代化以前の社会の実相を明らかにした「逝きし世の面影」が12万部を越すロングセラ―になっている作者である。見出しのみ書くと、上段に「資本主義の深化が共同社会を壊した まだ成長が必要か」、下段に「人と出会い交わる そこに一生の意味 何かを作り出そう」である。

―人が生きていくうえで、だいじなことは何だとお考え

ですか。

「どんな女に出会ったか、どんな友に出会ったか、どんな仲間とメシを食ってきたか、これが一番です。そこでどんな関係を構築できるか。自分が何を得て、どんな人間になつていけるか。そこに人間の一生の意味、生の実質がある。本来生きていることが喜びであるべきなのです。日本がGDPが世界で二位か20位かは関係ない」

―若い世代にアドバイスを。

「人と人の間で何かを作り出すことです。自分を越えた国家の力はどうしても働いてくるんだけど、なるべくそれに左右されず、依存もしない。自分がキープできる範囲の世界で、自分の仲間と豊かで楽しい世界を作っていく。ささやかに食っていける会社を10人くらいで立ち上げてもいい。僕も熊本でずっと、仲間と文学雑誌をつくっては壊し、つくっては壊してきたんです」

以上、インタビューの根幹を写した。私は小林秀雄のCDを繰り返し繰り返し聴いている。科学はここ300年の学問で、物理学を基礎にしている。理や利に叶うことが正しいことという考えに立っている。正しいことは大したことではない。正しいことは子どもでも分かる。冷静な眼^{まなこ}でこの世を渡って何になりますか、とか言っている。理屈でもなく、利益にもならない「もののあはれ」を知ること、これが人間らしく生きて行く道ではないか、

とも言っている。私はこの年になってよくよく考えて、
そうだそうだと思うようになりました。芭蕉の不易流行、
高悟帰俗の生き方、俳風の行き着く先の「軽み」に通じ
る考え方と思い、ここに紹介しました。

三好達治を読む vii

武者昭七

柿うるる夜は夜もすがら水車

三好達治は十四歳のころ（旧制大阪市立市岡中学）から「ホトトギス」などで俳句に親しんだという。右の句はそんな達治を代表するようにいわれる句。大正十五年達治が東大仏文科二年生（二十六歳）の作という。当時の恩師であった辰野隆^{ゆたか}はこの句にベルレーヌ的象徴性をみとめて教室でおおいに推奨したという。

石原八束の「三好達治 俳句断片」によれば辰野のいうベルレーヌ的な象徴性とは音楽性（韻律性）のことであるらしい。ベルレーヌがなによりも詩において音楽性を主張したことはよく知られている。

この句に即しているならば、「うるる」といい、“すがらーぐるま”と、ころがるような一句の音感が“夜は夜も”という句を間に入れて、さながら水車のごとくころがるところに、赤い柿の美しさがナイーブに夜空の中に浮び上がるのを感じるのはないか、「音は風景を描写するという象徴主義の見事な成果をここにみる」と石原は

いい、「まことに風景は一つの音楽のようなものだ・・・」という三好の言葉をそえている。

この句の韻律性と同時にもう一つ僕が感じるのは、この句の中に流れる「時間の感覚」、「時間意識」である。「夜もすがら」絶え間なく、回り続ける水車、ひっそりとしかし着実にうれていく柿の実、それらが暗示し象徴するものは一切のものを包みこんでこの列島の風景の上を流れていく永遠の時間である。三好の愛した旅も風景もそんな永遠の時間の流れであつたと思う。

(2013. 07. 18)

弟のこと

飯田孝三

天長節ノ紅白鰻頭分ケモセデ

ぼくには四つ違いの弟がいた。三歳になったばかりで死んでしまった。昭和十四年のことである。当時、天長節は紀元節、明治節とともに国の三大祝祭日で、その日の朝、全国の小学校では祝賀の式典が行われた。お役所なども同じだったろう。小学校では式終了後、紅白の大福鰻頭がふるまわれ、生徒たちはそれを貰って家路を急ぐ。その四月、ぼくは一年生、初めて紅白鰻頭をいただいた。家に帰ると、弟が「一つ分けて」とせがんだ。ところが、聞いてやらなかった。母にわけなさいといわれ、渋った。前の年まで、ともに兄から分けてもらっ

たのである。六年生だった兄がすぐ帰るから、「兄ちゃんから貰えばいい」、内心そう思ったのである。しまいに弟は「いらぬ。上兄ちゃんから貰う」と、欲しがらない。やがて兄が帰ってきた。けれども持ちかえったのは紅白の大福ではなく、干菓子だった。その年から饅頭は、三年生以下に限られ、四年からは干菓子に替ったのである。それをみて、「ぼく、やるよ」といっても、弟は「いらぬ」。母が口添えしても「ううん、いい」。とうとう弟は貰おうとしなかった。

それから半年もしないで弟は死んだ。方々で急性の黄疸が流行り、死者が多く出、近所でも十九歳の娘さん、小学五年生男児と弟が急に逝った。菓子、饅頭などの甘味は既に町や村の店先から消え、祝賀の大福はその年限り、翌年はすべて干菓子、それも確か翌々年には廃止された。そして、時代は次第に戦時色を濃くする。「欲シガリマセン、勝ツマデハ」。天長節の紅白饅頭^ゴ下賜は、その年が最後だったのである。

弟が死んでもう七十四年になる。弟の名は四^よ雄、みんな四^よ坊と呼んだ。ばんばんに膨れた、真黄色い腹を見せ転げ回った今際の姿が臉を去らない。

赤マンマ小サキ死出ノ足袋履ケル

三歳デ死ニタグレノブランコニ

(註) 天長節 現在の天皇誕生日(昭和天皇 四月二十九日)

紀元節 現在の建国記念日(二月十一日)

明治説 現在の文化の日(明治天皇御誕生日 十一月三日)

(平 25・08・12)

芭蕉のかるみ以後(29)

光成高志

芭蕉の処女作「貝おほひ」は無意識の軽みをなしているといった。寛文時代の流行の小歌やはやり言葉をいかに駆使しているかを十八番をあげてもう一度見る。

左勝

ほの上も大たばに出よ稲の束

適意

右

かぶけるは稲のほのじぞ京女臍

城次

左は「稲の穂よ、大束にどっさり出よ」という意である。「大束に出る」というのは当時のはやり言葉。穂、大束、稲と縁語仕立てにしている。右は「稲の穂が頭を傾けているのは、さだめし京女郎にでも惚れて媚びているのである」という意である。「かぶく」は傾くの意であるが、転じて媚びへつらう意となり、当時のはやり言葉であった。「稲のほのじ」も稲の穂に惚の字を掛けている。芭蕉のこの二句に対する判詞は

左の句。大たばといふを。稲の束にゆひまはされし事。かなたこなたをかりあつめて。鎌のえならぬ句作りにわたるの出づべきやうもなし。

又右の。京女臆にほのじは。たれもすき鍬の。かねがねのぞむ事なれど。稲のとのを持たれば。我が妻ならぬ妻なりと。先此恋はさしておくて田のひつちばへは其まゝにて。左を勝と定め田。

というものである。何回も朗誦すると縁語、掛詞がぐるぐるめぐってきてなんとなくわかる気がする。筆者は農作業を手伝った経験があるので、その記憶をたどっているうちにわかったような気持ちになる。「ゆひまはされし」は「束を結う」と「言い廻し」を掛けている。「かりあつめて」は「刈り集めて」である。刈り集めて稲束を作る。「鎌のえならぬ」は「鎌の柄」と「得ならぬ」を掛ける。「わらの出づべき」はぼろが出る意だ。左の句の大たばという言葉を、稲の束にいいかけ、あちこちと二語を取り合わせて、何ともいえない句作りは、ぼろが出ようがなくなりっぱなものであるという訳だ。

「たれもすき鍬のかねがね」は、誰だつて京女臆に惚れるのは好きで、兼々望む事なれど。稲妻は稲の殿御を既にもつているので、我妻にはできぬ女であるから、この恋は差し置き、晩稲田の櫓生はそのまゝにして、叶わぬ恋はそのまゝにして、左を勝と定めたというのである。「我妻ならぬ妻」は寂然法師の「さらぬだに重きがうへのさよ衣わが妻ならぬつまな重ねそ」から取っている。

宗房はこういう調子で十八番の判詞を書いたのである

が、貞門風の縁語掛詞ばかりでなく、その時代の遊蕩気分を取り込んで淫刺としており、既に談林を先取りしている。駄洒落も歌もうまい愉快な宗房というイメージが浮んでくる。これは軽みの境地ではないか。

海の青・空の青

武者昭七

人はみんな過去という時間のトンネルを潜り抜けて今ここにいる。トンネルにはいろんなものが詰まっている。振り捨ててきたさまざまの思い。断ち切られた願い。睦びあった友。こころひかれたいくつもの風景。ふりかえればみんな懐かしく優しく、そのうえ、どれもさびしい色にかすんでみえる。「海の色も空の色もはるかなるものはみんな青色だ」と詠うのは郷愁の詩人三好達治である。

かへる日もなきいにしへを　こはつゆ草の花のいろ

はるかなるものみな青し　海の青はた空の青

(かへる日もなき)

つゆ草は可憐な花である。いつのころからか我が家の庭ともいえない狭い庭のひと隅にも一本だけ花をつけだして僕の思いをさそってくれる。

四季派の詩人大木実の詩だったか、定かには覚えていないけれど少年の日の僕のこころに沁みて今も忘れ難い

詩がある。こんな詩だったと思う。(違っていたらご容赦を)

矢車のむらさきは 六月の海の色とも

あゝ はるかなるひと恋ふる むね痛み思ひとも

矢車の花も近頃はほかのあでやかな花たちに追われたのかあまり花店で見かけなくなってしまった。舌足らずな表現かとも思えるほどに抑制された表現からにじみ出る恋情が清潔で初々しい。矢車の紫から、はるかに開けた六月の海へ、はるかなるひとへ、せつない胸の思いが広がっていくところがなんともいい。はるかなるものはみな青に霞んでいる。

目の前に広がった青い海といえば僕は鎌倉の長谷寺のあの海にむかってせり出した舞台から眺める海を思い出す。長谷寺は山号を海光山といい海の輝きをそのままにとらえているのもいい。僧たちはここに立つてはるかなかなたにあるという観音の浄土を幻視したのであろうか。何度もういけれど、青ははるかなものへのあこがれを掻き立てる色なのである。そして海の青は季節とともにやがて濃い藍色に変わっていく。

海の藍石榴日に日に割るるころ

達治

2013. 04. 06

我孫子日記

8/15*蓮見舟例会。8/18**トライアスロン応援。

8/24***三匹獅子舞。8/25銀座。9/6新宿。

9/10京橋。9/11⁴*浅草。9/13⁵*荳吟行会。

9/18SOA。9/20例会。

* 30号参照

** トライアスロンバイク折り返す赤とんぼ

*** 三匹獅子舞出づに間のあり秋の蟬

三匹獅子舞吾も村人前で見ると

⁴* 白も咲き国際通り百日紅

国際通白さるすべり百日紅

⁵* 瀬祭忌根岸の里の書画を見る

あちこちに蚊遣香あり子規の庭

師弟つどうセピアの写真灯下親し

糸瓜忌も百三面を数えけり

子規の庭へちまの花のたつた一輪

良寛の仁のかすれ字鉦叩

編集後記

兼題句会を続けていますが、たまには吟行も必要と思います。文京区中央区の施設予約の登録をしました。10月11月は、吟行句会を入れました。どうか参加下さい。

題字をお願いした加納綾女さんが書き直されました。
今回からそれに差し変えました。ほんとに有り難う。